

者の処置、事務連絡等に目覚ましく働いていた。ここに收容の傷者達は學生及び看護婦の重傷者ばかりであつた。脳症状を呈した一少女が全裸で転々反転している様が見られ、一人残らず呻き、わめいている様は氣の毒の限りであつた。裏の土手を登ると高北病棟の庭に出る。そこで死体を焼いていた。つい先程樋渡という學生も茶毘に附せられたということであつた。

敗戦という精神的打撃と終日の勞働作業とに、ひどく疲れ日暮れて家路についた。途中本原町では朝鮮人の一団が、たき火を囲んでパンザイを連呼しながら祝宴をあげていた。くやしい限りだ。戦争は終つた。敗れたのだ。男は自決を覚悟せねばなるまい。婦女子は山野に逃げかくれせねばならぬかも分らぬなど語る内に夜は更けた。

その後被爆三十五日に妻が原子病で死亡、その頃私も冷汗と飛蚊症の発作で約四十日間悩まされた。白血球は四千に減つていた。

皮膚科学教室

当時、教室員として北村包彦教授、一ノ瀬健吾助教授、金子純彦講師、中山善敏助手、齋秀河助手、楊瑤麟助手、黒木重徳副手補、技工囑託の町田信治、間野正喜の両氏、雇の中村ハルエ、山田春子と山田八重子、一ノ瀬睦子、崎田テル子の諸氏それに満島ユリ看護長以下二十一名の看護婦が勤務中であつた。

被爆時の状況

北村教授、金子講師、齋助手、楊副手、黒木副手補は看護婦数名と共に外来診察室で被爆。一ノ瀬助教授は出勤途中で被爆。中山助手は治療室で火傷を負い、一週間後、北松今福で死亡。

黒木副手補は外傷なきも翌年初め原子病のため死亡。町田氏は出勤途中の路上で爆死。

中村ハルエ氏は医局の廊下で即死。

満島看護長は一階廊下で被爆負傷し時津の自宅で八月二十八日死亡。野副、浜辺両看護婦は一階研究室で焼死。

舩黒看護婦は外来治療室で被爆、上半身に火傷を負い翌日皮膚科防空壕内で死亡す。

平山看護婦は一階廊下で即死。

川谷看護婦は寄宿舎に病臥中で爆死。

橋本、林、若松の三看護婦は外来で被爆し、橋本、林看護婦は北松今

福で一ヶ月後死亡。若松看護婦も死亡す。

間野、山田、一ノ瀬の各氏は研究室で被爆、崎田氏は一階廊下で被爆し上肢骨折す。

山田八重子氏は休暇中であつた。

他の看護婦は外来及び看護室で被爆し殆んどガラス破片創を受く。

死亡者の官職と氏名

官 職	氏 名
助 手	中 山 善 敏
副 手 補	黒 木 重 徳
技 工 嘱 託	町 田 信 治
雇	中 村 ハ ル エ
看 護 長	満 島 ユ リ
四 年	野 副 ク ミ
〃	肱 黒 サ エ
二 年	橋 本 ユ キ ノ
〃	浜 辺 ヨ シ
〃	林 末 子
〃	平 山 タ ヅ 子
〃	川 谷 ミ ケ
〃	若 松 嘉 子

原爆・敗戦の年のこと

北 村 包 彦

あれから十年経つた今、原爆落下のもとから傷つき逃れた日のことを回想すると、一生決して忘れないだろうとその時は思つた事の始終にも、ところどころ記憶の空白を生じている。その上断片的な、感覚的、瞬間的なことがまざまざと思い出される半面、複雑な事件のあとさきの経緯と云つたことはかなり曖昧になつている。

原爆の落下、それはあの灼きつくように暑い日の午近くだつた。急に起つた騒然とした空気の動揺、一種の金属音と窓外を走つた閃光。それからどの位の時間が経過したか、気が附くと濛々と立ちこめた烟の底にうつ伏しになつていた。肘を立て、頭を垂れ、その頭から血が流れ出て眼の縁へまつわるのをぼんやり意識しながら、いつまでもそうしていた。

大学の裏山の甘藷畑が爆風で土が掘りかえされ、蔓が切れ、葉が飛び散つている中に、野良着の女の人が仆れていた。この時空は曇つていた。浦上の天主堂の煉瓦作りの堂塔が焼け落ち、大きな炭の焰のように紅く輝やっていた。急に大粒の雨が落ちてきたが、間もなく止むと雲が切れ、また暑い日射しになつた。人が山の段々畑に点々とし、ノロノロと動いていた。

調教授の坊ちやんが二人も歿くなつた。上の坊ちやんが三菱の工場で背中を火傷して、同教授の世話で間借りした疎開先の近くの滑石の家へ

帰って来られた。すぐに診てあげたが一週間後に歿くなられた。それから何日かしてしめつぼい杉木立の中の滑石大神宮の拝殿へ、負傷した角尾学長と山根教授とが運ばれて来、妻に手を引かれて見舞に行つた。その時滑石の山懐ろを出れたところの精米所で、ソ連の参戦と書いた新聞の記事を読んだ。重傷の山根教授は間もなく歿くなつたが苦しうだつた。角尾学長の歿くなつたのはそのあと、たしか二十二日で、この時はもう戦争は終つていた。東久邇内閣の文相に前田多門氏がなつた。学長はその人を識つていと云い、これから文教はどう變つてゆくだろうなど云われた。間もなく高熱が続くようになり、見舞に来られた古屋野教授も次第に気づかわれるようになった。古屋野教授は額を少し怪我されたが、全身的には疲労が強かつたようで、併しそれを押して、その上令聞を失われた悲しみによく堪えておられた。誰もその家族でなければその友を失つていた。その人たちは原爆落下の瞬間に原素に還り、それでなければ散り散りの場所が多くはひとり苦しんで死んでいつた。このことはその人々との繋りがある一瞬にバツサリうち切られたように感じさせ、この感じは今に続いている。

原爆のあと数日して終戦になつた。どうもそうらしいと云う噂を疎開先の老主人がどこからか聞いてきた。暑いが暮れかけた時刻で、暗くなつてゆく庭先を見ながら茫然と湧いてくる悲哀に浸つていた。電気はあれ以来来ず、ラジオも聞えない闇の中にいつまでもぼんやりしていた。

額や臉にはいつたガラスの破片を一ノ瀬博士に除いて貰つたが、そのうち毎日微熱が出るようになり、鏡で見ると軟口蓋に小出血斑が一つ二つ出来てきた。もうその頃には原爆症のことがだんだん判つてきた。九

大の救護班に血液を檢らべてもらつたら、白血球は併しあまり減つていなかった。

長崎の町に白服のアメリカ水兵が氾濫したのは何日頃だつたらう。その連中はジープや大型車に分乗して爆心地帯を見物に行つた。大学の汽缶場の煙突が一本曲つたまゝで聳え、山王神社の石の鳥居が一本脚になつて立つていた。

少し元氣になつたが、右上眼瞼の縦の裂傷の延長が角膜をも損傷したらしく、ものが霞んで見えた。それを診ていただきに、浅沼前教授のお宅へ上つた。それから少しして調教授と私とが、学生と一緒に大村の海軍病院へ休養がてら行くように云われ、行つてみると原爆患者の調査にアメリカの軍医団が来ていて、東京から外科の都築教授や、病理の三宅助教授が同行されていた。都築教授から聞いて東大の皮膚科の太田正雄教授が歿くなつたことを知つた。

いつまでも秋晴れの日が続き、コスモスの咲き乱れた丘の上の病舎の一部が大学の教室になつて、不完全な講義が少しづつ始まつた。戦後急速で活潑になつていつたアメリカ医学への接触が、こゝでは軍医連との接触から出発した。大村でお世話になつた泰山院長にはいま東京で時々お目にかゝるが、アメリカの雑誌へ送られた、長い英文長崎原爆始末記の原稿を最近見せて頂いた。

新興善小学校が市内での大学校舎になり、大村とバスで連絡するようになって、私は調教授と連れだつては、疎開のまま居着いた滑石から大村へ、又長崎へと通つた。長い秋が漸く冬となり、新興善小学校の硝子の割れた校舎を風が吹き抜け、その中で私たちは冷たい弁当を使つた。

まだそうなる前に教室員のうち台湾出身の蕭君、楊君などが国へ帰り、入れ換えに荒木助教などがボツボツ復員して来た。学生への講義はどうかこうか続けられたが、物資不足は日一日と深刻になり、生活は愈々苦しくなって来た。併し明けて昭和二十一年元旦、新興善小学校の臨時の講堂で、一同古屋野学長の訓辞を聴いた時は何か心あらたまる思いがした。

あれから十年の月日が流れた。今年格別の大暑は東京にあつて長崎の灼きつくようだったあの日を思い出させる。永遠に訣れ去った人々の安らかな眠りと長崎大学の繁栄を祈つてやまない。

(三〇、八、六)

原爆記念日におもう

土 橋 房 子

今日も又あの日のようにちぎれ雲が飛んでいる。

涙と憤りの中に十年の歳月は流れ去つたがあの日の惨状は恐らく私達のいのちのある限り脳裡から消え去る事はあるまい。

昭和二十年日毎夜毎敵機の来襲は烈しさを加え、緊張した空気の中に私達は、ひたすら必勝を信じながら日夜病む人の看護に當つていた。

天井板を利用して重要書類や物品の疎開準備し、患者の待避訓練や防空演習を行った。又敵機来襲の下で手術を行い、ローソクの光で重症患

者の治療を続けることもあつた。しかし部長先生初め、諸先生婦長さん方の温い慈愛に包まれ、苦しい中にも張り切つた日々を送つて来た。此の頃庭を耕して作つた菜園にお芋や野菜がみのり、皆で喜んだ日も思い出の一つである。そして八月一日遂に私達の病院も初めて爆弾の洗礼を受けた。

此の時は地下に避難した為何事もなく、崩れ落ちた外科や婦人科の建物に無念の涙をのみながらもほつと自分達の無事を喜び合つたものだったが：

八月九日運命の日はやつて来た。此の日も早くから待避命令が出された。八月一日以後は病院でも特に患者をいち早く安全な屋外で待避させていたが間もなく解除になつたので直ちに病院に帰し皆それ／＼の仕事についた。そして心の平静を取りもどした頃、突然強烈な熱さを感じ、はつとして振り向いた。一瞬、閃光に目がくらんだ。とつさに爆弾かしら？もう駄目だのがれる事は出来まいと思つた。そのまゝ意識を失つてしまつたらしい。

どの位経つたか「苦しい、先生苦しい」と云う声にふと我にもどつた。病院より小高く続く畑の中を中山先生の白衣の裾にすがり林さん(看護婦)と二人よろめきながら歩いている自分を発見した。しかし一足毎に力が抜けて行く。ともすれば其の場にすわり込みそうである。「元気を出せ此処では危いもう少し上迄登るんだ」と先生はしきりに励まして下さつたが、とう／＼手を離し、つかれた体を其のまゝ畑になげ出した。

眼下の街々は火の海である。熱風と煙にまかれ苦しさは益々つる。

それに激しい嘔気をおぼへ、息は苦しくなつて来てじつとしていられない、もうどうなつてもいゝ、私は畑の上にもだえ転げた。

病院も学校も街も、窓という窓からは火をふき、其の炎は天をこがしている。

真黒になつた空に太陽丈が真赤に無気味な色で西に傾いていた。其の恐しさに目を伏せておののいた。

大粒の雨が降つて来た。

何時の間に来たのか看護婦の竹谷さんが全裸のまゝで寒い／＼とつぶやきながら身を震わせて立っている。私もはいていたはずの靴も何処で脱いだかない、足には大きな傷があつて血がべつとり流れている。幸にも予防衣を着ている事に気付き直ぐぬいで竹谷さんに与えた。ひつたくる様にしてとつた白衣を胸にかけ、倒れたり立つたりして苦しさにじつとしていられない様子だつたが、次第に気力も失せてだまりこんでしまつた。

私も又意識を失つていたが気がついた時は辺りはもう夜になつていて炎に浮び出される黒い影丈が右往左往していた。水をほしがる人、子をかばい救いを求める母親、親を探してさまよう子、友を呼ぶ者、声という声が死骸の谷にこだましている。

やがてそれら声も次第次第に細つていった。一人二人と息絶えて行つたのだらうか、そして苦しみの一夜を明かした。真夏の太陽がざら／＼と照りつけて来た。

体を起して眺めて見る。何という有様だらう目に入る限り死体の山、地獄絵さながら、苦しさにもだえ死んだ人々が、眼も閉じず、髪を乱し

て死んでいる。内臓や目が飛び出している人、裸で全身火傷を負つて黒くなつている人、仰向けに倒れて大きく腫れて死んでいる人、しかしまだ虫の息で転んでいる人や最後のうめきが続ける者もある。

共に生きのびた喜びも束の間、看護婦の竹谷さんも苦しみと戦つたいたましい姿で死んでいた。それにしても昨日迄の師であり、友であつた人達はどんなになつたのだらうか、早く会いたくてたまらないが、全身の激しい倦怠を感じ足がふらついてどうしても歩けない。然し私は這つてもと其処からおける決心をした。

畑のあぜにつかまりながら足を運ぶ。すると「助けて下さい、何処へ行くのですか、此処へ来て下さい」としきりに叫ぶ人が居る、ふと目をやると昨日迄は起居を共にした若い看護婦が変り果てた姿で放心した様になつてみている。

動く事さえ出来ない友が呼んでいる。苦しみに疲れた表情で眼の前に転んでいる。何かしてあげたい、側にいつてやりたいと思うが体が思う様に動かない、咽がかわいてしまつて声さえもよく出ない。どうにも上げて上げる事の出来ないのを悲しみながら縋る腫を後にした。

こうしてあたりは動かなくなつた人と動けない人達ばかりである。水がほしくても与えてくれる人もない。元気な人はどん／＼上へ登つて何処かへ行つてしまつた。

一番下の鼻にさしかゝつた時、眩黒さんと会つた。「土橋君もやられたか、眩黒さんも其処にいるんですよ」と寝ていられた北村先生が耳鼻科の看護婦薄本さんと交した言葉が聞えたのか這ひながら近寄つて来たが余りの姿に声も出ない。大変な火傷で顔は真黒くなつて腫れ、目も口

も分らない。

後で防空壕へ担架で運ばれたが其の夕方「ガバツ」と身を起し其処においてあつた水をあほりながら息絶えた。

私は通りがりの人に助けられてグラウンド迄来た時、其処にたゞずんでいる人影を見つけた。姿は見る影もなく変つているがまごう事なく中山先生と五人の看護婦だつた。ようやく会えた私は思わず我を忘れて近寄つた。

一応病院に下りようと調理所の裏迄歩いた。此処には負傷者が次々に運ばれてひしめき合つている。其の入口に一人の学生さんらしい人が背中に火傷を受け息も絶え／＼にもだえていた。

私も強心剤、鎮痛剤の注射を受け皆の集るのを待つた。

しばらくして満島婦長さんも来られた。放心した様な青ざめた顔、其の面に流れた幾筋かの血の跡、髪は乱れみる影もない。声をかけても気が失せたのか苦しげな表情がかすかに動くばかり……平素婦長さんはお元氣だつたが、此の頃は時々、胃痛を訴えられ休まれる事があつた。昨日外来に出ようと一階廊下におりられた時被爆されたと聞いている。

其の夜皮膚科の防空壕に移り、夜を明かした。明ければ八月十一日、敵機は尙も長崎上空を旋回しつゞけている。

私は其の日家に帰る事にした。杖を片手に父に支えられて、血液がこびりついた足を引きづりながら、かん／＼照りつける太陽の下、異様な屍臭のたゞよう灰の街を歩いた。此の浦上一帯は爆心地に近かつた為、其の被害は筆舌につくしがたい。

火の手をさけて逃げ得なかつた人々が一塊の灰と化し、或はあちらに

一つ、此処に二つ三つと転つて居る。昨日迄は家庭の主婦であり、幼い子供達の姿り果てた姿でした。泣き叫ぶ我が子を抱いた母親が火が廻つて逃げ場を失い、もがきながら焼け死んだのであろうか、大きな灰の中に小さく抱かれた骨が道行く人の涙をそ／＼つて居る。

夕方ようやく家に辿りついた。

其の後次第に腹部は腫れを増し、食物や水分さえも摂る事が出来ない様になり、寝たきりの毎日が続いた。思う様に田舎では手当が出来ないので福田病院に入院した。初めは一進一退して居た病状も、九月半ば頃より快方に向い、十月の初めには退院の許可も出る程になつた。此処の病院でも手厚い看護を受けながらも、出血、下痢、倦怠等の症状が現われ一人死に二人減りして毎日不安であつた。

十月に入るともう柿も色づき秋も深い。こうした或る日部長先生からお便りを戴いた。思いもかけない先生のお便りを手にして、懐しさと、感激に握りしめた書面を何回読み返したかわからない。

先生がお怪我の身をおいといなく病院のためにお励み下さつて居る事を知つてからはまだ栄養もよく摂れず、健康回復には日がかゝりそうだつたが、一日も早く病院へ帰りたい気持ちにかられ、準備をした。

ようやく尋ねた玄關に入り生き残つた友達と顔を合せて再会の喜びに暫らくは言葉も出ず、たゞお互にみつめるばかり……。

一瞬にして病院は廢墟と化し、多くの師や友を失つた。今ほもう中山先生の何時も聞いたあの声も、婦長さんのやさしい笑いもそしてなつかしい顔もなく、ほがらかだつた眩黒さん、肥つて何時もにこ／＼顔の野副さん、一年数ヶ月で原爆の犠牲となつた六人のクラスメート、教室補

助の中村さん、ぼつりぼつりとユーモアをもらされたムラージュ技工の町田さんの姿もなく気の抜ける様な教室に唯呆然とたづんだ。

然し悲しんでばかりもおれない。壊滅した教室は生き残った私達の手でもう一度建てなおさなければならぬ。

此の十年の歩みは此の日に始まった。

× × ×

十年後の今も尙、原爆生存者はたえず原爆症発病の不安にさらされている。

九死に一生を得た原子爆弾生存者の一人として、全世界の人々にそのおそろしさと罪の深さを伝え、此の世から戦争と原爆をなくし、真の平和を打ち立てるよう努力する事は我々に与えられた義務と感ずる。原子野は今目覚ましく復興し、平和の鐘がいきわ高く鳴り渡る。めぐり来た原爆十周年を機にあの日の長崎の姿をもう一度みつめ、犠牲となられた方々のみたまよ安かれと祈りつゝペンを擱きます。

(皮膚科泌尿器科勤務)